

真名本訓読本系統『曾我物語』本文考
——鶴舞本系列諸本の位相——

小井土 守敏

稿者は旧稿において、真名本訓読本系統『曾我物語』の管見に入った伝本一〇本を、真名本（本門寺本）の本文に照らして、以下のように三系列に下位分類することを試みた。（括弧内は本稿における伝本の略称）。

日本大学蔵本

慶應義塾大学図書館蔵本

静嘉堂本系列

静嘉堂文庫蔵本

國學院大学図書館蔵武田祐吉氏旧蔵本

犬井善壽氏蔵本

実践女子大学山岸文庫蔵本

鶴舞本系列

名古屋市立鶴舞中央図書館蔵本

静嘉堂文庫蔵松井簡治氏旧蔵本

東京大学附属図書館南葵文庫蔵本

国史叢書所収本（翻刻）

その際、鶴舞本系列諸本については、「配字・配行まで共通する模写本のグループである」と概括し、

鶴舞本系列諸本は、省略や、文意が不通になってしまいう程の誤脱があり、本門（真名本）から最も離れる本文となっている。乱丁の継承の様子から、南は松の転写本である可能性がある。

と整理した。つまり、日本大学系列・静嘉堂本系列・鶴舞本系列の順に、誤

写・誤脱が生じ、意改等も施されて、本文が真名本の訓読体から乖離していくと見たのである。各系列内の本文流伝については、より細かい調査報告の必要性を感じながらも、紙幅の都合で割愛した。

そこで、本稿において、鶴舞本系列諸本——鶴・松・南の三本——の本文を、さらに委細に検討していくことによつて、本系列内の諸本の位相について考察し、旧稿の補いとしたい。

二

以下に、鶴・松・南の各本の書誌を記す。

鶴 鶴舞中央図書館蔵本（河村文庫所蔵）

・ 外題「曾我物語 大石寺本 上（下）」 *左上に題箋。

・ 内題「曾我物語 大石寺本」 *「大石寺本」は別筆。

・ 上下冊としての尾題はなし（巻三以外の各巻末に「曾我物語一（十）の巻終」）。

・ 全二冊 *巻ごととに筆が異なり、巻によつては、綴じしる部分の余白がほとんどない巻があることなどから、現在の装丁は後装であり、原装は一〇冊と思われる。巻二以降の各巻頭は、丁を改めて「曾我物語巻第二（十）」とする。巻一の上欄に一ヶ所、頭書（訓の注）がある。

・ 墨付丁数

冊	丁数	計
上	34 29 22 21 19 21 16 17	125
下	33 24 24	111
計	236	236

*遊紙なし。各冊、前後の表紙に見返（白紙）あり。

- ・ 每半葉一〇行 一行約二〇字 漢字平仮名交り
- ・ 二三、八 cm × 一六、七 cm (半紙本系)
- ・ 函号「河ソ19」

松 静嘉堂文庫蔵本 (松井簡治氏旧蔵)

- ・ 外題「謝徳闢靜集 一 (ノ十尾)」 * 左上に題箋。卷一のみ右上に「曾我物語」の題箋、及び左上の題箋「謝徳闢靜集」の下に「大石寺本」と小書きあり。

- ・ 内題「曾我物語」 * 卷二以降「曾我物語卷第二 (ノ十)」。
- ・ 尾題「曾我物語一 (ノ十) の巻終」 * 卷三のみ尾題なし。
- ・ 全一〇冊、原裝 * 全卷一筆。一部の固有名詞に同筆による読み仮名が記される。卷一の上欄に一ヶ所、頭書(訓の注)がある。

・ 墨付丁数

丁数	卷
34	一
29	二
22	三
21	四
19	五
21	六
16	七
17	八
33	九
24	十
236	計

* 遊紙なし。全卷、前後の表紙に見返(白紙)あり。

- ・ 每半葉一〇行 一行約二〇字 漢字平仮名交り
- ・ 二七、〇 cm × 一八、四 cm (大本系)
- ・ 函号「167」

南 東京大学附属図書館蔵本 (南葵文庫所蔵)

- ・ 外題「大石寺本曾我物語」 * 左上に直書。卷一のみ別筆。
- ・ 内題「曾我物語」 * 卷二以降「曾我物語卷第二 (ノ十)」。
- ・ 尾題「曾我物語一 (ノ十) の巻終」 * 卷三のみ尾題なし。
- ・ 全一〇冊、原裝 * 全卷一筆。読み仮名、勘物、濁点等の書き込みが随所に見られる。その多くは本文の書写とは別筆と思われる。
- ・ 固有名詞に朱による傍点・傍線が付されることあり。

・ 墨付丁数

丁数	卷
34	一
29	二
22	三
21	四
19	五
21	六
16	七
17	八
33	九
24	十
236	計

* 遊紙なし。卷一ノ六の最終丁は、後表紙の見返を兼ねる。

- ・ 每半葉一〇行 一行約二〇字 漢字平仮名交り
- ・ 二七、二 cm × 一八、四 cm (大本系)
- ・ 函号「E2477」

以上のように、墨付丁数、行数等の数値からも、これらの三本は近似した伝本群であることがわかる。なお、書写年に関する奥書等は記されていないが、いずれも近世末期の写と思われる。

三本の中でも、松と南は、その寸法をはじめ、装丁の面でも共通点が多い。この二本は、卷一の後表紙見返の貼り合わせ部分に、「後ウ未上リノ子四仕入ツキメソキノ全十ノ二百三十六丁」(松による)という四行の書き入れがある。南によると、破損部分は、「墨」という字のようにも見えるが、その意味するところは不明である。但し、「全十ノ二百三十六丁」というのは、この二本の冊数と丁数を示しているものであり、おそらくこの書き入れは、表紙をつける前に書肆によつて記された、符丁のようなものと思われる。つまり、この二本は、書肆——あるいは転写本を作成することを職業とした人々の手によつて書写された本である可能性が高いのである。なお、松には、「萬太」という墨印が施される。南にはこれがない。

本系列の三本は、卷十末尾に半葉を割いて以下の識語を記す(鶴による)。配字・配行は三本同じ。

此書は駿州富士山下大石寺日蓮宗にあり／秘て世に不出 往年水戸侯
光圀卿／懇望ありて写給ひしより外になし 此比／官命ありて 又秘
府にも写しとめて／蔵められしといふ 今河津氏（祐福（二字細字））
／家本をもて頼に写しとめて侍りぬ／祐福は河津三郎祐道（祐成時致
／實父也（七字細字））の遠孫／なり 尤珍重すへしと云々
＊を付した部分に、松「宮」、南「宮」（「官力」ト傍書）と異同が見られ
るが、文意から「官命」が妥当である。

なお、この識語は、次に掲げる靜が有する巻頭の序文（二丁分に相当）
の前半部分とはほぼ重なるものである。

孝義双列録

此書駿州富士山下北山本門寺（一大／石寺（四字細字））に有（日蓮
／宗也（四字細字））／秘して世に出さず 往年水戸侯（光圀／卿（三
字細字））懇望有／て写し給ひしより外になし 此比／官命ありて又秘
府にも写しとめて蔵／られしと云 河津氏（祐／福（二字細字））ハ
河津三郎祐道（祐成時／致実父（六字細字））／の遠孫也（當時幕下
／ノ大舍人（八字細字）） 宗（家）ト朱傍書）に秘しておかれしを
其族／河津（祐之／舍人（四字細字））我知友なれば 強て求奉りて
写し／侍りぬ 書中之題号は故之まゝにて 爰に／孝義双列録といふハ
さりし年 広津（沢）ト朱傍書）先生（細／井（二字細字））／（次
郎太／夫知慎（六字細字））曾我兄弟之廟之額を書給ひしに「孝義双
列之四字あり 予記憶したるまゝ／事付てしか云り

元文五年庚申秋九月／小宮山昌世題

巻頭序文と巻末識語という相違はあるが、その前半部分の近似性から、
鶴舞本系列が静嘉堂本系列の中の特に靜の低位に位置すると考えられる。
ただし、明らかに小宮山昌世が執筆したと考えてよい序文の後半部や、昌

世によつて与えられた「孝義双列録」という別題は、鶴舞本系列には見ら
れない。また、四本に共通する、本書の来歴に関する文言は、「と云ふ」
と引用されるように、必ずしも小宮山昌世による作文と断言できない。例
えば、それぞれが書写した所拠本に記されていた来歴を、小宮山昌世は序
文を執筆する際の資料とし、鶴舞本系列はそのまま記したに過ぎない、と
いうような経緯も想定し得る。よつて、靜と鶴舞本系列諸本との直接的な
書承関係について考えることは留保したい。

ちなみに、松・南の識語で生じていた「官命」の異文は、靜の序文によ
つても、「官命」で良いことが分かる。

三

この系列において、鶴を善本として本系列を代表させてよいことは、旧
稿で示した通りであるが、紙幅の都合で示し得なかつた鶴本文の優位性を
示す例を、以下に掲げる。

1 鶴 文を以ハ……武を以ハ四夷の乱を鎮む

松 文を以ハ……武を以て四夷の乱を鎮む

南 文を以ハ……武を以て四夷の乱を鎮む

天下の政道を文武の二道に求めるくだりである。鶴は「以ハ」とするの
に対し、松・南は「以て」と記す。「文を以ては……、武を以ては……」とい
う対句表現を見ると、鶴の本文が整っていることは明らかである。また、
真名本の訓読体により近い本文を有する静嘉堂本系列の靜に、「文を以ハ
……武を以ハ」とあることから、鶴の本文が本来的であると認められる。
ちなみに鶴の「ハ」は「盤」を字母とする変体仮名であり、松・南の「て」
は「天」のくずしである。「ハ（盤）」から「て（天）」への直接的な誤写
は想定しにくい、その間に「ハ（者）」字を挿んでみると、誤伝の流れ

が想定できる。しかも、細部の対句表現は崩れるものの、文意に変化はなく、書写上、文字数の変化も生じない。

2 鶴 俄にあんたといふものにむなしき屍をかきのせて

松 俄にあんたといふのにむなしき屍をかきのせて

南 俄にあんだといふ非の非むなしき屍をかきのせて

この例は、「篋輿といふ物に」とあるべきところで、松・南の本文に誤写・誤伝が生じていると言える。南は、その誤りに気づいて見せ消ち(「」で表示)とし、修正を試みたのである。

3 鶴 使者をたて、こまくと申されける

松 使者をたて、こまくと申されける

南 使者をたて、こたくと申されける

「細々」、「是々」、「こたくと」という異文が生じている部分である。鶴の「ま」字は「万」を字母とする変体仮名であり、「多」を字母とする「た」と混同されることが、書写本にはしばしば見られる。南の表記はかなり崩れており、「ま」とも「た」とも読めるものの、いずれかといえば「た」と読める、といった表記である。そして南に書き入れを施した人物は、「た」と読んだ上で、傍記を施したのである。松は、「連」を字母とする「れ」と記す。「万」もしくは「多」の最終画から繰り返し記号「く」へ続く連綿を「しんによう」と判じて、「れ」と記したと思われる。結果的には文意も通りそうではあるが、この部分を静の本文にあたってみると、「使者を立て細くと申されけれハ」とあり、鶴の本文が妥当であることがわかる。

4 鶴 此人も失ハすハあしかりなと思ひつゝ

松 此人も失ハすハあし×りなと思ひつゝ

南 此人も失ハすハあし×りなと思ひつゝ

「悪しかりなん」とあるべきところであるので、松・南の単純な脱落である。南の書き入れは、その誤脱に気づいたものである。

5 鶴 入道自害し候を御覽し其後御心に任せらるへし

松 入道自害し候を御覽候其後御心に任せらるへし

南 入道自害し候を御覽候其後御心に任せらるへし

これも、書写においてしばしば見られる誤写の例であるが、「し」字を「候」と読み誤つたものである。文意は通じるものの、静に「自害し候を御覽し其後…」とあり、松・南の本文は本来的なものではないことがわかる。

鶴舞本系列のこれら三本は、配字・配行まで共通する伝本群ではあるが、文字のレベルで以上のような異同が生じている。また、後にも触れるように、松・南には、全巻で二ヶ所の乱丁が生じている。つまり、本系列内においては、鶴は乱丁もなく、誤写等による本文の乱れが少ない本文を備えていると言えるのである。

四

書誌的情報、ならびに前掲の例により、鶴と、松・南との間に一線を画することができ、且つ鶴が善本であることが明らかにできた。次に本節では、松と南の本文の関係を検証してみる。

松と南は、書物の体裁をはじめ、配字・配行はもちろん、仮名の字母までもがほぼ共通する——南には別筆の書き入れが多く施されているが——模写本である。しかし、以下のような本文の相違の例が見いだせる。

6 鶴 其後相撲も相違なく二の宮の御方勝にけり

松 其後相撲共相違なく二の宮の御方勝にけり

南 其後相撲も相違なく二の宮の御方勝にけり

7 鶴 雪いとふかうふり積て都たも行かふ人も希なるに

松 雪いとふかくふり積て都たそ行かふ人も希なるに

南 雪いとふかうふり積て都たも行かふ人も希なるに

8 鶴 出家の後伊豫の入道とそ申ける

松 出家の後伊豫の入道とそ申ける

南 出家の後伊豫の入道とそ申ける

9 鶴 山内ハ此詞に乗×しつゝ何事にても今ひとつ仕て

松 山内ハ此詞に乗かしつゝ何事にても今ひとつ仕て

南 山内ハ此詞に乗×しつゝ何事にても今ひとつ仕て

10 鶴 落葉の君のためしもあるそかし

松 落葉の君のためしもあるそ×し

南 落葉の君のためしもあるそかし

11 鶴 御經をよみてなき人×の菩提をとふらひ

松 御經をよみてなき人×の菩提をとふらひ

南 御經をよみてなき人×の菩提をとぶらひ

右は、いずれも鶴・南の本文が妥当であり、松の本文が乱れている例である。例8の□は、「し」のくずしとも、「かし」と記したとも読める判読不能部分である。松には、判読が困難な字形が他にも散見される。例7における「そ」字も、「毛(も)」のくずしよりも「曹(そ)」のくずしに近い。その書写の態度は、文意を汲みながら書き写していくというよりは、むしろ《模写》することに力を注いでいると思われる。もちろん、所拠本自体の表記が判読困難な字体であったため、所拠本のまま書写した可能性も考えられるが、例11などは、その書写の姿勢がよく顕れている誤謬な

のである。

但し、南が松の所拠本であるかという点、そうではない。これまでの例とは逆に、南の本文が不適切である例も見られるのである。

12 鶴 名譽天下に聞へさせ給ふ色ふかくわたらせ給ひければ

松 名譽天下に聞へさせ給ふ色ふかくわたらせ給ひければ

南 名譽天下に聞へさせ給ふ也ふかくわたらせ給ひければ

13 鶴 此よしを聞付て要心きひし×くするあいた

松 此よしを聞付て要心きひし×くするあいた

南 此よしを聞付て要心きひし×くするあいた

14 鶴 懷嶋土肥岡崎その外の人々各感し合×れけり

松 懷嶋土肥岡崎その外の人々各感し合×れけり

南 懷嶋土肥岡崎そのほの人々各感し人それけり

15 鶴 とにもかくにも仰にしたかふへく候

松 とにもかくにも仰にしたかふへく候

南 とにもかくにも仰にしたかふへく候

16 鶴 臂をさし違へ真中へとうとそ×落しける

松 臂をさし違へ真中へとうとそ×落しける

南 臂をさし違へ真中へとうとそ×落しける

17 鶴 河津か女房の悲しミたと×ふへきかたそなき

松 河津か女房の悲しミたと×ふへきかたそなき

南 河津か女房の悲しミたと×いふへきかたそなき

18 鶴 いまた八月にたらざるに誕生をそ×し給ひける

松 いまた八月にたらざるに誕生をそ×し給ひける

南 いまた八月にたらざるに誕生をこそし給ひける

南も、松同様、専ら《模写》に力を注いでいる。文意を汲みながら書き写していかば当然回避できたであろう誤写が散見され、その傾向は松よりもむしろ顕著である。字形までも模写することによって、逆に判読が困難な表記となり、それらを書き入れや見せ消ちによって修正——もしくは読みやすい表記で確認——する。例えば、例14の「入そ」などは、「合」一文字と見えなくもないが、書き入れを行った人物が「入そ」と判じ、さらなる異文を発生させたものの、「感じ入られける」と意改を施すのである。

また、以下のような例もある。

19 鶴 いとうき事におもひわひ唯ふし沈_ミてそ居たりける

松 いとうき事におもひわひ唯ふし沈_シてそ居たりける

南 いとうき事におもひわひ唯ふし沈_シてぞ居たりける

20 鶴 まかきのうちのなてしこのたゝまくおしき夕暮に

松 まかきのうちのなけらこのたゝまくおしき夕暮に

南 まかきのうちのな_{けら}しこのたゝまくおしき夕暮に

例19でいえば、「三」のくずしである「ミ」と、「シ」(之)及び「に」(尔)の間で生じた誤写である。妥当な本文はいうまでもない。そして松・南では、ここでも文意を汲まない書写態度が伺える。

例6以降に見てきた事例は、松から南、もしくははその逆という本文流伝の経緯は考えられないことを示している。ただし、松と南は、体裁や書写の態度等から極めて近い位置にある伝本であることは確かである。ほぼ同時期に、共通の所拠本を《模写》したものと考えて大過あるまい。

五

次に、松・南が、系列内最善本の鶴を直接の所拠本として書写した可能性を検証する。

松・南の二本が所拠本を忠実に《模写》する傾向が強いことを考えると、既に先掲の例1-5から、鶴が松・南の所拠本である可能性は否定しうるが、誤写・誤伝の範疇でもあるので、他の例を示してみたい。

21 鶴 幼き人々の末々の御ちからに成給ふへし

松 幼き人々の末々の御ちからに成給ふへし

南 幼き人々の末々の御ちからに成給ふへし

この例は、鶴と松・南の間で、字母の異なる仮名表記が行われているものである。鶴が「尔」、松・南が「二」を字母とする「に」を用いる例は、他にも見いだせる。本文としては異文ではないものの、松・南の書写の態度からして、鶴をその所拠本とする可能性を否定する例である。この他、《模写》を専らとする松・南と、鶴の間に断絶を認めざるを得ない本文異同に、以下のごとき例がある。

22 鶴 国くくの侍・・とも 五 十六人なり(「は丁替わり)

松 国くくのさむらひとも 五 十六人なり

南 国くくのさむらひとも 五 十六人なり

この例では、「侍」の表記と丁替わりが異なっている。この三本は、配字・配行までおおむね共通しているが、かような相違が見いだせることから、鶴と松・南の間に一線を画することになるのである。

先述の通り、松・南は、全巻で二ヶ所——巻一と巻八——、しかも同じ箇所だ錯簡・乱丁を生じている。巻一におけるその様子を示すと、次のよ

うになる。

鶴 …… 次郎助親ハ兄伊藤武者助繼むなく[×]」^A 成ければ河津の…

松 …… 次郎助親ハ兄伊藤武者助繼むなく[×]」^B の庄の利券文書…

南 …… 次郎助親ハ兄伊藤武者助繼むなく^か」^B の庄の利券文書…

鶴 …… 道理なきも道理に成伊藤」^B の庄の利券文書いたつらに…

松 …… 第四にハ元服の親なり旁以」^A 成ければ河津の屋形を出て…

南 …… 第四にハ元服の親なり旁以」^A 成ければ河津の屋形を出て…

鶴 …… 第四にハ元服の親なり旁以」その重恩報しかたくそ…

松 …… 道理なきも道理に成伊藤」その重恩報しかたくそ…

南 …… 道理なきも道理に成伊藤」その重恩報しかたくそ…

松・南は、AとBの丁が逆順になってしまっている。南は、Bの丁へ移る直前の「むなく」の後ろ、行末余白に「か」と書き入れを行い、「むなく、かの庄の利券文書」と、本文を繋げようとする意図が見られる。尤も、そうした試みも、次の丁替わりではなされることはなく、文意の繋がらない本文となってしまっている。なお、巻八において生じている乱丁について、南は何ら書き入れを行っていない。

松・南は、同一の丁で《乱丁》を生じているが、これまで見てきたように、両本の書写の態度を踏まえると、これらの伝本で生じているこの現象を、《乱丁》と呼ぶこと自体に、疑問の余地がある。書誌情報で記したとおり、この二本は原装と思われる。後装の際に不注意によって生じる錯簡である可能性は極めて低い。もちろん、書写後、製本の際に生じた錯簡であるとも考えられるが、同じ錯簡が二本で生じていることには説明がつかない。つまり、この二本の所拠本は、既に錯簡・乱丁を生じており、それを忠実に《書写》したと考えるのが妥当なのである。

以上のことから、鶴は松・南の直接の所拠本たり得ない。そして、鶴が松・南の直接の所拠本ではないにもかかわらず、これらの三本が配字・配行がほぼ共通するということは、鶴は松・南に比較して良い本文を伝えてはいるものの本系列の原型ではない、ということが出来る。鶴もまた、ある本を配字・配行まで注意して《模写》した本なのである。

鶴には僅かではあるが次のような誤謬がある。

23 鶴 俣野はかちほこ^ろて御角力あるましく候ハ、

松 俣野はかちほこ^ろつて御角力あるましく候ハ、

「勝ち誇つて」が妥当な本文である。「こ」の最終画から「つ」への連綿を合わせて「ろ」と見誤ってそのまま写したものと考えられる。

ちなみに、鶴の本文には、ときどき意図の不明な空白部分が見られる。皇族等の貴人の直前や、文末・句末に設けられた空白には、慣例や意図を認めるとして、例えば「中有の旅へつれゆけ」という部分で、「中」と「有」の間に一字弱分の空白があったりする。これは鶴が、所拠本の配字・配行の通りに《模写》するために調整を行ったか、あるいは所拠本に既に空白が存在したと考えるのが妥当である。鶴もまた模写本なのである。

最後に、南の書き入れについて見ておく。現在の資料条件では、現存する他本を参観して、南が《校合》を行ったものとは考えにくい。例2や3等に見られる書き入れは、容易に修正しうる誤謬であるので、結果的に鶴や松の本文と合致し、これらの本と校合したかのようにも考えられる。しかし、例16に見える「とうとこそ」という書き入れについては、本系列以外の諸本を見てみても、「こそ」という異文が見いだせない。ま

た、例14や、乱丁部分における本文修正の試みも、他本を参観してのことではない。さらには、「武士の仕業」として「馬上・歩立・打物・腕取」と列挙する部分で、「腕取」に「腕立か」と書き入れるなど、賢しらとも言えない書き入れを見いだせることなどから、南の書き入れは必ずしも《校合》の痕跡ではないと考えてよい。

六

煩雑な検証を重ねてきた。本稿を整理しておく。

真名本訓読本系統の諸本のうち、鶴舞本系列に分類しうる伝本は、すべて「模写本」と考えてよい本である。そして、近似した本文であつても、調査し得た三本については、松・南が極めて近い関係にあり、鶴は他の二本とは小異がある。鶴は比較的良好な本文を有し、ひとまず本系列を代表するが、やはり転写本である。そして、この三本の転写本うち、いずれかが他本の所拠本であると確定することはできない。松と南は近い関係にあるものの、直接の書承関係は証明し得ない。旧稿における「南は松の転写本である可能性がある」という推定は、本稿において訂正する。

真名本訓読本系統諸本の中では、鶴舞本系列は、最末流・最後出の伝本グループである。しかも、《模写》という方法によつて複製された伝本群である。こうして作成された写本が複数存在するということは、同様の手法によつて他にも写本が作成されたであろうことは想像されてよい。そうした伝本について、現在の資料条件の下での検討ではあるが、ひとまずグループ内における現存諸本の位相を明らかにしておくことは、無為なことではないはずである。

[注]

- 1 拙稿「真名本訓読本系統『曾我物語』本文考——三系列分類の試みと本文の吟味——」(國語と國文学79/10、二〇〇二年一〇月)
- 2 国史叢書所収本文については、底本不明の翻刻資料でもあり、校訂を経ていると思われる部分も幾々見られるので、本稿では触れなかった。
- 3 国文学研究資料館のマイクロフィルム資料(一九八三年目録収録)によると、巻二以降に外題はなかったが、現況では巻二以降にも表紙右上に「大石寺本曾我物語」と同筆で直書がある(二〇〇三年一月五日調査)。
- 4 松に存在する読み仮名などの傍記については南にも見え、それらの書き入れについては本文と同筆と判断して良いと思われる。
- 5 本系列の三本には、静には示されている書写年(巻頭序文末尾に元文五年(二七四〇)、一部の巻末に文政元年(一八一八)七月(十二月)の書写年及び「青柳方剛」の書写者名を記す)についての記載がなく、正確な書写年はわからない。
- 6 静嘉堂本系列諸本において、かような序文を有するのは静のみである。

「付言」本稿をなすにあたり、貴重な資料の閲覧をご許可くださった関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

(こいど もりとし 昭和学院短期大学人間生活学科 助教授)

本稿は二〇〇三年度科学研究費補助金(若手研究B)による助成を受けている。